子どもは宝
ちち母親の仕事です。

お母さんは、世界をイメージしながら、
地域でアクションする。
さぁ今年も「お母さんはスゴイ！」の
幕開けです。

◆小さな一枚の「お母さん業界新聞」が届いた。そんな時、私の心がうれしくなる。お母さん大学に入学してくれた人にも何も教えず、ただペンを持ってねと私。その実技課題に素直に向かってくれた山崎美由紀さんの『SUNSUN版』（久留米市）。1面に「お母さん大学に入って変わったこと」が書かれていた。「①今まで自分の思い通りにならないとイライラしたり、怒ったりすることが多かったけど、今は冷静に考えられるようになった。②この子は、今何をしたいんだろうと思えるようになったこと。③子どもを見ていて、これは新聞に書ける、そう思うと怒ることがなくなった。④子どもの直感は素晴らしいと気づけたこと」。余計なことは教えなくても、お母さんならわかる。その小さな新聞が、同じように子育てに悩んでいるお母さんを笑顔にするものであると、山崎さんはまだ気づいていない。小さな新聞ではない。大きなお母さんの心いっぱいの新聞だ。ありがとう。山崎さん。

◆どのお母さんも、みんな「いいお母さん」になりたくてがんばっている。わが子は、ただそばにいてくれるだけでいいのに、子どもはどんなお母さんも好きと言ってくれるのに。それでも、もっともっといいお母さんになりたいとがんばる。いい母親になりたいと思う気持ちは悪くないし、素晴らしいこと。いいお母さんとは、どんなお母さん？　その答えを知っているのはわが子。わが子を思い、わが子を見つめると、いいお母さんが見えてくる。やっぱり、わが子が先生だ。

◆ペンを持つだけで母力が上がる。いや、人間はそんなに簡単に変われない。ペンや新聞づくとほとんどのお母さんが言う。いつも、そんなお母さんの心に癒され、それがエネルギーになっている。

◆世の中はどんどんおかしくなっていないか。あるマンションの住民総会で「あいさつ禁止」が明文化された。「知らない人にあいさつされたら、逃げるように教えているので、あいさつしないように決めてください」という小学生の親からの申し出に、年長者たちも「あいさつが返ってこなくて気分が悪いので、お互いにあいさつはやめましょう」と賛同したという。わが子を守るには住民の目が一番の安全と、母親に教える人がいない。あいさつしない自分に気分が悪くならないのか、住民に聞きたい。お母さん大学が旭化成ホームズと一緒に提案する、子育て共感賃貸住宅「ヘーベルメゾン母力」は、みんなで子どもを守り育てようという住宅だ。安心できる場所、心地いい場所は、みんなでつくるもの。「母力」には不審者も入ってこれないはずだ。

◆2006年に熊本市、慈恵病院に設置された「赤ちゃんポスト」（こうのとりのゆりかご）。赤ちゃんポストができた時、すぐに病院を訪れ話を聞いた。当時は、心のどこかに育児放棄を助長するのではないかと違和感を感じる自分がいた。が、これまでに125人の乳幼児が預けられ、命が救われた。無責任な価値観の自分だった。病院側の苦悩は並大抵ではなかっただろう。あれから8年。ますます子どもの命を大切にしない社会になっている。赤ちゃんポストに預けられた子どもたちが、誰より幸せな人生を送れるようにと祈りたい。

◆昨年末、特別養子縁組あっせ

◆赤ちゃんポスト（こうのとりのゆりかご）は、ドイツの「ベビークラッペ」という施設をモデルにつくられたが、ドイツには、もう一つ気になるしくみがある。それは、望まない妊娠をした女性に匿名での出産を認め、出産後、8週間まで母子で生活する場所を設けていること。その間に母親は、子どもを自分で育てるか、養子に出すかを決めることができるのだが、なんと約半数が自分で育てる道を選ぶのだという。子どもを産むだけでなく、子どもを育てる中で、母としての愛情がわき、育てたいという気持ちになるのだろう。施設や養子縁組で育つ可能性のあった子どもたちの約半数が、実母の元で育つことになるのだから素晴らしい。

◆このしくみを日本で実現できないだろうか。ドイツのように施設でなく、地域の中に母子を迎える家があれば。わが子を育てたくないという母親に、家族のあたたかさを味わってもらう。あふれる愛に包まれて、母親の子どもを育てたいというスイッチがONになるだろう。里親のあっせんではなく、「やさしい家族あっせんします」のほうが、100倍母子の幸せにつながるはず。他人を受け入れることは容易ではないが、子どもの声が消えたまちに母子が来れば、どれほど地域の未来が光輝くか。地方創生というが、過疎村には、素晴らしい子育て環境がある。自然とのふれあい、人との関わりや温もりに包まれた豊かな生活。子どもに故郷をプレゼントできないか。

◆横浜で起きたいじめ事件。福島から原発事故で自主避難した子どもが「ばい菌」と呼ばれ、同級生からいじめられた。現在は中学1年生。その子が小6のきな影響を与えているに違いない。働く母親（父親）にとって朝は戦争のようなもの。だから3分でいい。今日一日を気持ちよく過ごすために、親として、子どもにしっかり向き合って、お互いいい一日を送ろうと伝えたい。わが子と向き合うその3分をどうつくるかが問題だ。子育ては時間ではない。どれだけわが子と同じ世界にいられるか。いや、同じ世界で一緒に楽しめるか。イクメン、イクボス大歓迎。子育ての本質を男性が理解すれば、もっといい子育て社会が実現するだろう。明日からできること。

◆「保育園落ちた、日本死ね」が、昨年の流行語大賞に選ばれた。昨年は騒動で幕を開けた。ようやく静まったかと思いきや、受賞で再び話題になり、なんだか気持ちよくない自分がいる。当事者の母親にとっては、保育園に入れないことは一大事かもしれないが、保育園に落ちて日本が死んだら、わが子は生きられない。今こそチャンスとばかりに、子育て支援策も何もない政治家たちが、待機児童数をゼロにすることが正義だと声高に言った。かつては「ワーキングマザー」といっていた働くお母さんを、最近は「ワーママ」と呼ぶ。ワーママから批判されるかもしれないが、私は、母親が安心して「家庭」や「地域」で子どもを育てることを重視する制度が必要だと思っている。せめて、子どもが母の手を必要としている間だけでも。そんな中、政府は、児休業を最長2年まで延長する方針を固めたと報道。理由は、保育園に入れない母親のためという。待機児童数を減らすことが政策目的だからしかたないが、子育てを楽しむことで、母親が笑顔になり、子さんと息子さんの空の向こうに希望が見える。

◆先日、久々に子守隊の皆さんが「一日お母さん大学」に参上してくれたが、その力は枯れていなかった。普段男の人にはなつかないという女の子が、しっかり子守隊のおじいちゃんに抱っこされていた。その姿は、まるでウルトラマンヒーローか、ボディガードのケビン・コスナーのよう。それを見て、おじいちゃんの子守隊を復活させたいという欲望がむくむく…。よし、隊員を募集しよう。バージョンアップした子守隊は「子まもり隊」。子守りだけでなく、日本の子育てを本気で考えなければならない時代。地域の籠り隊（籠っている人）の皆さん、そろそろ出番です。子まもりの後は、おいしいお酒を飲み、未来を語るお楽しみつきです。

◆お母さん、新聞を読んでいますか？　今は新聞（一般紙）を購読していない家庭がとても多い。パソコンでもスマホでもニュースは読めるが、「新聞は世界の扉」という通り、自分の欲しい情報だけでなく、さまざまな情報と出会うきっかけになる。イヤなニュースばかりの日もあるが、心が動くニュースやコラムに出会うこともある。ウェブとは異なり、文字や行間に温もりがある。同じニュースでも、新聞によって視点が違うから正解はわからないが、正しい情報を見つけるためではなく、社会の今を感じ取ればいい。お母さんがふらっと来て新聞が読める「ニュースカフェ」をつくりたい。お母さんが新聞を読んでいる間、子どもの面倒は子守隊のおじさまが見る。新聞を読んだお母さんが、気になる記事について質問すると、それはこういうことだよと答えてくれ

◆お母さんだからできること。まずは、お母さん記者＝マザージャーナリストを職業として確立させること。お母さんの視点でペンを持つ。家庭や地域の中に大切な仕事がある。社会の大きな問題は、嘘の情報、つくられた情報が蔓延していること。お母さん記者が発信する情報に嘘はない。なぜならお母さんは、嘘をついて子どもに罰が当たってはいけないからと絶対に嘘は書かない。そんな母親たちの情報こそ価値あるものだ。お母さん記者の仕事はペンを持つだけではない。地域にあるさまざまな問題を解決するための企画を考え、プロジェクトを実施する「お母さんプロデューサー」でもある。すでに動き出している「ミソマザー」や「マザージャーナリスト」が新たな仕事になったら、子育てをする母親の評価は一気に上がるはず。そんなお母さんたちをサポートしたいという人も現われた。お母さん大学生が地域でアクションするしくみづくりが、人生の振り出し（還暦）を迎えた藤本裕子の今年の宿題である。お母さん大学生には迷惑をかけるかもしれないが、何もしなければ何も起こらない。失敗は成功の母。失敗を重ねながら、少しずつ「百万